



保育の中の物語(2)

く・や・し・い!

岸井慶子

今どきこんなに悔しがる子がいるだろうか。鬼ごっこで捕まったときに、写真のような表情をして、かぶっていたカラー帽子をつかみ取り、ぐちゃぐちゃに握りつぶしたかと思うと、今度はそれをかみしごいて、体をよじるようにして怒りをあらわにし、握りしめた帽子を地面にたたきつけて、遊びの場から抜けたのだった。その表情を見ると、うっすらと涙が光っている。大またで荒々しく走った先は、鬼ごっこ全体が見渡せるブランコだ。

学級全体で数日前から楽しんでいるこの鬼ごっこは、ジャンケンと同じ仕組みで、一方から逃げつつもう一方を捕まえる三つどもえの助け鬼だ。それぞれのチームには帽子の色に合わせた青、赤、黄色のチーム名が付いている。さす



がに三年保育の五歳児らしく、ルールをしっかりと理解して機敏に走り回り捕ま
えたり捕まったりを楽しんでいる。捕まると相手チームに連れて行かれ「たす
けてー。○○たすけてー」と思いきり声を張り上げ、仲間の名前を呼びながら
手を伸ばし助けを待っている。まるで捕まったことを楽しむかのようだ。単学
級で一緒に三年間、あるいは二年間を過ごしてきたからこそ培われた、何とも
言えない仲間関係を感じる。

写真の男児は靖男。幼稚園の誰もが「ヤッチ」の愛称で呼ぶ、元気で体格の
よい男児だ。鬼ごっこ開始時には、ほかの幼児と同様に張り切って庭に出た。
鬼ごっこが始まってからも、活発に動き回り、相手を挑発したり、素早く走っ
て赤チームを捕まえたり、仲間の女児を助けたりしていた。

それが中央付近で黄色チームの男児に捕まった。

後ろから服のすそをつかまれたのだ。ヤッチは服をつかむ手を振り払おうと
するが、相手は離さない。そこで冒頭のような流れになった。

ブランコを、これでもかこれでもかと大揺れさせて、「青ぐみ まっける」
を叫んでいる。何と自分のチームを応援するのではなく「負ける」というの
だ。自分が抜けたのに、自分のチームが勝つなんて許せないのだろうか。

すると、いきなりブランコから降りて黄色チームに捕まっている女児を素早

く助け、手をつないで青陣地に戻ろうとした。担任に「それはずるい」と止められ、追い打ちをかけられるように「ヤッチ、だめだよ。ずるいぞ。捕まっただから」と義男に大声で指摘される。

ヤッチは、再びブランコに戻り激しくブランコをこぎながら「青ぐみ まっける」を大きな声で繰り返し叫ぶ。やがてその声もブランコの揺れも次第に小さくなり、うつむき加減のヤッチの背中は丸く小さくなっていく。一度抜けた鬼ごっこへの再デビューとしては最高の場面だっただろう。何人も捕まっていた相手チームに颯爽と乗り込んで助けだす。まるでヒーローだ（つたはずなのに）。自分が抜けても、周囲の状況は何一つ変わらずみんな鬼ごっこを楽しんでいる。

さてここまでお読みになった方は、どのような感想をもたれただろうか。「五歳児の発達としてどうなの」「あと三か月もすれば小学生のこの時期、自分が捕まったからといって遊びを抜けるなんて。幼すぎる」と思われる方がいらっしゃるかもしれない。

でも、ここまで悔しがる子がいてもいいではないか。ほどほどに遊びを楽しむ「わけしり」の子どもが増えている今、私はこの直情を大切にしたいと思っただ。担任の「今までのヤッチなら部屋に帰っていた。あの場に残っていたのは



彼の成長と受け止めたい」という言葉もある。彼なりに成長もしているのだ。また、不可解だった「青ぐみ、まつける」の言葉も、「ピンチになったら、僕が助けに行くよ。そのときは僕の力を再確認するよ」の意味があったのではないかとも考えられる。強烈な自負心を感じる。

ビデオで捕まった場面を詳細に見直してみると、捕まった瞬間、ヤッチは相手の陣地に向かっている。しかしそこで義男（黄色チーム）に「タッチしたよ」と正面から宣言されている。ヤッチにしてみれば、わかっていることをわざわざ面と向かって言われ、プライドが傷ついただろう。さらに今度は、義男に後ろから服をつかまれて引っ張られている。ここでヤッチの怒りは頂点に達する。ほんの一瞬の出来事を、スローで詳細に見ることによってわかってきたことだ。

さらに、朝からの遊びの様子をビデオで見直すと、生まれ月も早く周囲の幼児からの信頼も厚い義男を中心に遊びが進むことに対して、ただ一人反対し自己主張するヤッチの姿がある。孤独な戦いを挑んでいるのだ。そう気づいて鬼ごっこを見直すと、ヤッチと義男が相手を意識していることに気づく。

わがままな幼い男児の物語が、プライド高い男児の物語に変わった。

（鎌倉女子大学短期大学部）